

# 日曜に想う

編集委員 大野 博人

## 寅さんは旅に出ている

クリストフ・マルケさん(51)は、フランスでまだ知られていない日本の文化を伝えたくて仏語で本を書いた。そして、日本でも知られていないから日本語でも出版しませんか、と提案された。

「最初はちょっと戸惑いました。日本語にするのは大変です」と流暢な日本語で話す。

その日本語版が最近、出版された。江戸時代に守り札などに使われた民画を扱った「大津絵 民衆的諷刺の世界」だ。

マルケさんに声をかけたのは、KADOKAWA社の編集者で美術書を多く手がけている伊集院元郁さん(33)。

「大津絵には専門書や画集はあっても一般向けの入門書は限られていました。出したかったけれど、書けそうな人も見つからなかった」。そこへ仏語の本の評判を聞いて、話を持ちかけたという。

マルケさんは、若いころには東大にも

留学して勉強した日本美術史の研究者で、東京にある日仏会館・フランス国立日本研究センター所長だ。日本文化に詳しくて当然かもしれない。

「へえー」と驚きながら読んだ。大津絵がかつて浮世絵と人気を競っていたこと、無名の職人の手になるために芸術作品として残りにくかったこと、生活や道徳を鬼や七福神の滑稽な所作に託して伝えていること……。

色刷りで掲載されたたくさんキャラクタたちは今にも動き出しそう。奇抜な祭りを描いた絵もあり、マルケさんは「民間信仰や庶民文化を理解するうえで、内外でもっと広く知られるべきです」と意義を力説する。

「まずやりたいのは山田洋次監督の特集だ」

「『男はつらいよ』で？」

一瞬、反応にためらいを見せた私を、クロード・ルブランさん(52)が諭す。

「あのね、寅さんが日本人にしかわからないとか、その心情がとも日本的だとか思うのは日本人だけだからね」

日本語に堪能で日本や東アジアの時事問題に健筆をふるう仏ロピニオン紙記者だ。その傍ら、月刊情報誌「ズーム・ジャパン」を出したり、日本映画の新旧の作品を上映する活動に取り組んだりしている。これには6年間で約1万人の観客を集めた。上映後に作品や日本を語る会を開いているが、ほとんどの人が帰らずに参加するという。

手応えに力を得て、来春からは仏中部の保養地ビシーで日本映画祭を定期的に開きたいと考えている。初回は山田監督のさまざまな作品に焦点を当てたい。

日本映画は外国でも人気が高いのは知

っているつもりだけれど……。

「いやいや、日本文化への関心は、君たちが想像している以上なんだ」。目下、資金集めなどに奔走しているが、とりわけ日本側から理解を得るのが難しいのだという。

2人とも、もどかしそう。日本文化が十分に知られていないこと以上に、その価値を自分でまだよくわかっていないこと

とに、それを自分で外に発信しようという気持ちに。

マルケさんは仏国立東洋言語文化研究所の教授でもある。ルブランさんもここで日本語を学んだ。この教育研究機関では欧州の主要語を除く100近い言語を教えているが、希望者が一番多いのはここ20年以上つねに日本語だそうだ。

どこかちぐはぐだ。最近の日本は日本ブームとでもいってべき様相を呈している。日本を強調するテレビ番組や書籍も目白押し。

「だけど、それはみんな内向きの話でしょう」とルブランさん。日本人が日本人に向かって日本はすばらしいと自画自賛、でも外に向けては、その文化を共有してもらおうことに熱心には見えない、というわけだ。

「せっかく魅力を感じている人が外国にたくさんいるのに。もたもたしている、この波がそのうち引いてしまわないか心配」

外の世界と出会おうとしないまま自画像に酔う。葛飾柴又に閉じこもったままではフーテンの寅さんにならない。

姉妹「よく来たね」

絵・皆川明